

開催日：1988年

講師：森 一久（中央公論社、電源開発、原子力産業会議）

出席者：島村武久、田中好雄、川島芳郎、後藤正記

森：少し科学史的なお話を最初に致しますと、1938年（昭和13年）にウランの核分裂という現象が発見され、ドイツのハーンとシュトラスマンの二人の業績ですが、要するに中性子をぶつくとウランが核分裂をするらしい。後でいろいろ調べてみますと、核分裂と同時に2~3個中性子が出るらしい、だから工夫すれば鼠算式に反応を広げることでもできそうだし、それから話がちょっと細かくなりますが、いわゆる遅発性中性子、遅れて出る中性子がある事もわかった。この核分裂で遅れて出る中性子がなければ、平和利用なんてのはできなかったわけです。爆発だけになるからです。この遅れて出る中性子の部分を制御して連鎖反応を一定に保つことができるのですから。それらのことが数ヶ月ぐらいの間にばたばたと発表されてるんです。ただ、翌39年の4~5月頃から段々発表がなくなって、これは何かあるということで、日本でも情報をとり始めたわけでした。

つまり、まず平和利用の可能性があること、次に、ウラン235を濃縮する方法とウラン燃料で原子炉をつくりその使用済燃料からプルトニウムを抽出する方法との、二つの原爆製造の道がある事は、かなり早くから米英などが気づいていたわけです。そして、日本でもご承知のように理研では仁科芳雄さんを中心に、京都大学では荒勝文策さんを中心にいろんなことをやっております、ご承知のように43年には、だいたい「日本ではできない」「アメリカでもこの大戦中には間に合わんだろう」という判断を一応政府に仁科さん等が答申したりしてるんです。しかし、そのあとも仁科さんを中心にある程度の勉強はしておられたわけです。私のいた京大では、遠心分離法や電磁法による濃縮で、理研でやっていたのは主として熱拡散法ですけど。そういうようなことがありまして、そんなことで、広島に原爆が落ちた1945年8月6日の2日後、8日ぐらいに仁科さんが広島に乗り込んで、これは原爆だということはすぐにわかったわけです。

しかし、「この戦争にはアメリカといえども間に合わないだろう」という思い込みは、戦争中ずっと続いていた。1945年には、実はアメリカ政府内では、原爆投下の是非、投下地点の選定などで、相当激しい議論が進み、3~4月ころからは所謂「ハト派」の学者は除外されて検討が進んでいました。その影響か、或るアメリカの冶金学者が5月はじめ、日本の親友に「原爆投下が決まった。ヒロシマが危ない！」という極秘の手紙を、身の危険を顧みず送り届けた。その結果一人の学生が急遽、広島を中心部に住んでいた家族を田舎に疎開させ、命が助かったという秘話があります。この話は関係者が50年近くも口外しなかったし、関係した両国の著名な学者連は逝去されているので確かめる術もないのですが、私の親友である「その人」に問い質した印象では、手紙を受け取った教授も相談をうけた方も、半信半疑のままとにかくその学生にアドバイスした、ということのようです。

それで進駐軍がやってきて、9月の半ごろにはもうすぐ、放射性不安定元素とU-235の大量の分離は禁止する、研究はやってはいかんとに触れを、GHQ(General Headquarters)の命令で出しております、戦争が終わって3ヶ月の後には、理研や阪大や京大のサイク

ロトロンをアメリカ軍が破壊してしまったわけです。

しかし後で調べてみますと、11月頃からもうアメリカでも軽水炉などの各種炉型について、特許申請は始まっていて、これは早く特許を取りすぎてくれて、日本が平和利用に着手した頃には特許の期限が切れ掛けとったんで良かったんですけども、だいたい46年中くらいにはほとんどの型の原子炉型まで、アメリカでは特許が成立しておりました。ですから、ある程度関心を持って調べていた人には、原子力の平和利用の可能性があるということは、ある程度分かっていた筈と思うんです。その後、アメリカに次いでソ連やイギリスやなんか原爆をつくったり水爆をつくったりしたのです。

アメリカ軍も、サイクロトロンまで壊したのはちょっとやりすぎかなって感じはあったらしく、この話は前に茅 誠司さんが言ったと思うんですが、1950年に放射性のアンチモン125を日本に0.4キュリー送ってきまして、おっかなびっくりで、今考えると漫画みたいな話なんですけど、その箱の蓋を開けたのが、垣花秀武さんであるか原 禮之助さんであるか、両説があるんです。記念写真を見ると、Kさんがちゃんと立っている。(笑い)

島村:原君は自分で開けたように言ってるし。

森:開ける瞬間の写真の前に立ってるあいつって怒ってる人もいる。(笑い) この本にはH氏らが苦労して開けたって書いてあるんですけど、両氏ともまだ健在ですからこの話はこれ位にして。(笑い)

[「温故知新(斎藤信房、日本原子力学会誌 No.7:1990) 東大化学教室中庭で開封作業を行なった。主な作業者は斎藤信房、原 禮之助、垣花秀武であった。」「戦後初のアイソトープ輸入から半世紀(原 禮之助、Isotope News 2006年1月号) 梱包を開く時の写真では、斎藤信房先生の脇に原氏。」 原氏の回顧では、仁科研から東大化学教室に運び、中庭で斎藤先生を中心に原氏等が容器の開封をしたあと、後から出てきた隣の研究室の垣花氏が開栓した。翌日、朝日新聞の求めにより、開封作業を垣花氏が再現し、それが朝日新聞に掲載された]

それが1950年です。ですけど一般の間では、日本の原子力の平和利用の可能性にはあんまり関心がなかったと思います。原水爆の方に皆の関心が行っておりましたから。アイゼンハワー声明が出たのが1953年ですから、その3年前。しかし50年頃からアメリカの原子炉のデータなどが公表され始めておりますから、ぼつぼついろいろなものを、英語の資料を読んでおればある程度わかったんだろうと思うんです。

日本に最初に関心を持っていたのは誰か、それを後で記録づけてみますと、殆んど無いんですけど、橋本清之助(日本原子力産業会議副会長)さんの話では、1948年の12月の終わり頃に、後藤文夫さんが戦犯解除になって巣鴨から出てきたんで迎えに行ったら、「大変だ、アメリカでは原爆で発電をしてるそうだから、日本はエネルギー資源を獲得しようとして戦争やったんだから、日本も考えなきゃいかんんじゃないか、英語の新聞にそう書いてあったぞ」と言われたのが、原子力との最初の出会いだと。後藤文夫さんは、ご承知の2・26事件の頃内務大臣(1934年7月~36年3月)だった人ですけども、あの方は英語も非常に勉強しておられたし、巣鴨の中で英語の新聞読んでそんなことに気が付くくらい、むこうの新聞にはかなり関連記事が出てたと思うんです。ですからおそらくメーカーさんの方では、興味ある方はご存知だったかもしれない。かなり早い時期から、GEやウエディングハウスなどがそのほうに関心を持ってたと思うんですが、あまり表には出て

いないんです。

1950年にアイソトープが日本に来たのを契機に、アイソトープ協会の前身ができたのが51年ですからかなり早い時期で、後で社団法人のRI協会になるんですけども。その後、いろんなことがあって、この前の茅先生や伏見先生のお話のように、3原則とかの問題が浮上したのです。私が大学を出ましたのが48年ですが、その頃、どうも原子力平和利用の問題があるらしいっていうんで、日本でそれをやるなら軍事利用に巻き込まれないようにやらなきゃならんと、「原子力談話会」というのをつくりました。だいたい全国の大学助手クラスにゲキを飛ばして、まあ若気の至りですけども、52年くらいでしょう、富士山麓の精進湖の小学校の教室を数日間借り、40人ほど集まって勉強会をやったりしました。伏見さんや湯川さんや朝永さんから五千円ずつ出して助けてもらったのを覚えてます。あの当時としては大金で、今にして思えばよく出してくれたと思うんですが。

そんなことをやっておりまして、3原則なんて議論をしておいた時期の理論付けというか下働きしてたのが、この辺の人々でした。私はそれほどでもないんですが、若い方では、服部 学君とか、大塚益比古君とか、そういう人たちと、なんとか平和利用を始めるための条件を模索しとったという状況です。

そういうことやっている時に、53年の6月なんですが、財団法人電力経済研究所が、日本で原子力平和利用を「大いに推進すべきである」、それにはこれこれ、という建議書みたいなを出したというのが新聞に出まして、私ども嘴の黄色い頃ですから、私と先ほどの2人と3人（森、大塚、服部）で、けしからんと抗議に行っただけです。財界の人が原子力を儲けのための仕事にしようとするなんてとんでもないと、まあ、28歳ですから――。

行ってみたら、丸の内の中何号館で、赤レンガの薄暗い建物が並んでました。新聞で見たことがある石黒忠篤さんとか、後藤文夫さんとか、岩田宙造さんとかで、論語だか孟子だか声出して読んでるわけなんです。それで「お前たちよく来た」ってわけで、「いや俺たちはその、戦犯でもあったけれど、日本をめちゃくちゃにした責任を痛く感じている。原子力が日本の復興の役に立つんだらうと思ってやっとなら、儲けようなんてそんなケチなことは考えてない。」と言った話がとっかかりになって、外で文句言っていないで中に入って来いってことから、私など、ミイラとりがミイラになったということなんです。

電力経済研究所は、日本発送電（株）を解体する時に、一株あたり端数が出たんですが、それを集めて財団法人にした。運用資産5千万円、基本財産6百万円。それで何をやるかというんで、当時主婦連会長だった奥むめをさん等も理事となり、電力コストを合理的にきちんとしなきゃいけないということと、新しいことを考えなきゃいかんということ。それで、橋本さんも含めて何人かの方で、原子力を勉強しなきゃいかんということになったのでしょ。しかし、どうも後で聞いてみますと、かなりためらいがあったんです。やはり核アレルギーといいますが、うっかり原子力利用なんて言うと、大衆からの大きな反発をくうかもしれない、やっていいのかねという感じはかなりあったようです。この気持ちは、視点は違ってもいいかもしれませんが、松永安左衛門さんにもあったようです。ですから、なかなかエンジンが掛からない。そこで、今日島村さんがお配りいただいた資料にもありますように、最初は原子力と言わずに新資源エネルギー研究委員会って名前つけて、実際は原子力の研究会をやっていた。杉本朝雄さんとか、伏見康治さんとか、いろんな学者に原子力の原理を聞こうってことで、定期的に会合を持っていた。

たまたま 1954 年の 3 月 2 日に、突然初めて原子力予算 2 億 3 千 5 百万円が国会に出た時も、東京駅のステーションホテルの会議室で勉強していたところへ、藤岡由夫さんが飛び込んで、「大変だ大変だ、政府がもう国家予算をつけちゃった」と。さあどうするか、学界も早く態度を決めなきゃあと、飛び込んで来たりしたことがあったんです。このように、早い時期に、電力経済研究所は手をつけておったわけです。

私はたまたま、電力経済研の近くの丸ビルの、中央公論社に勤めていたので、夕方の 5 時か 6 時ごろからは、電力経済研に出掛けて行って、たまたま旧知だった事務局長の早川淳一さんが手伝って言うもんだから、翻訳などいろんなお手伝いをしていたんです。そうこうしているうちに、原子力予算も付いたということで、2 年近くたってちょうど原産ができる前の年、1955 年 6 月に原子力平和利用調査会というのに名前を変えたわけです。

一方そのころ、主として瀬藤象二さんとか高橋 實さんとか、どっちかというところと電気工学系統の方で、勉強会をする必要があると。その世話をどっかで引き受けてくれるところはないかというので、瀬藤さんは当時東芝の専務だったかと思うんですけど、スポンサーを探して、結局電力中央研究所に頼み込んで、「原子力発電資料調査会」ってのをつくったのが 54 年の 12 月です。そこでいろんなグループをつかって、ジュネーブ会議の第一回が 55 年 8 月だったですから、その論文でも集まって読もうってんで、最初はジュネーブ会議の論文読み会みたいだったんじゃないかと思うんです。そういうことをやっておいて、外務省にジュネーブ会議の論文が来たなんていったら、僕らも押し掛けて行ってそれを持って来て、複写して読んだりしていた、そういう熱気にあふれていた時代です。

それから、先ほどちょっと島村さんがおっしゃったように、55 年の 6 月頃ですが、これはむしろ正力松太郎さんが、経団連もやらなくちゃおかしいってということから、原子力利用打合会っていうのをつくられた。この 3 つができとったわけで、ひとつは電力経済研、日本発送電の流れです。そういう流れと、電力中研に宿借りしておる、安川第五郎さんが会長をしておいた原子力発電資料調査会、それから、経団連の中に正力さんがつくった原子力利用打合せ会或いは懇談会、この 3 つの流れがあったということです。

そこで、ぼつぼつ原子力予算を消化もしないといけないうし、島村さんはじめ役所の体制もだんだん整ってきて、11 月には原子力研究所が、もう法律なんかつくってたんじゃ間に合わないからってんで、財団法人の原子力研究所が発足ということになった。その頃、アメリカではちょうど 55 年の 6 月にフォーラム (AIF : Atomic Industrial Forum) ができていた、最近 USCEA (United States Council for Energy Awareness) と名前を変えたようですけど(さらに、1994 年には NEI : Nuclear Energy Institute に改組)。これができておいて、その時に今の電力経済研究所の中の原子力平和利用調査会のほうから、どうも民間でいろいろやっとならなくても、対学界という意味も含めて、産業界も連絡会ぐらいつくらないと、あまりばらばらにやっちはいけないということで、提言などはしていたんです。

これは間違いのないと思いますが、橋本さんと正力さんというのはご存知のように最後の貴族院議員、勅撰の貴族院議員です。戦争末期に、華族でもなく多額納税者でもない議員ができたんです。唐沢俊樹さんと正力松太郎さんと橋本清之助さんの 3 人だったと思いますけど、まあそういう仲間です。橋本さんはなにかあると、正力さんのところへ行って相談するんだなんて話しておられました。たしか、或るトップの人を呼んだときの講演会の帰りに、日本でも政府が一本になったのだから、民間もまとまらなければいかん。

民間に一本になれって正力大臣から言わせようっていうことになって、「今からそれじゃちょっと行くから、お前ここで車降りろ」ってんで、私たしか日比谷あたりで放り出された覚えがあるんですけど。それで表は正力さんが呼びかけて、民間一本になれと(1月20日原子力委員会での正力発言「橋本清之助、松根宗一、菅 禮之助各氏と小坂順三氏との手を握らせねばならぬ」)。そこで、名前もアトミックフォーラム、フォーラムっていうのをどういう風に訳すか、会議所か、会議所じゃなんか静的というかあんまり魅力がない、「会議」がいいんじゃないかって、「原子力産業会議」っていうことになった。発足したのが56年の3月1日だったわけです。そういう風な3つの流れが合流したわけです。

1954年3月に、政界のイニシアチブで、中曽根康弘さんや斎藤憲三さんなどが、原子力で思い切り予算をつけようとして、例の保守3党共同の予算修正があったわけですけど、しかし学界の左だかなんだかが、七面倒くさいことをいろいろ言う。そこで、そういう人たちも入れて、「3原則」を掲げてみんなで国論統一してやろうじゃないかと、踏ん切りをつけた。皆これに乗り遅れちゃいかんっていう雰囲気はありました。けれども、電力会社関係はさきほどちょっと申し上げましたけれども、大御所の松永さんもそれほどでもなかったように思います。ただその時に、当時東京電力の会長だった菅 禮之助さんを原産会長にしたのは、非常によかった。あの方は、戦後石炭庁の長官でしたが、戦争中から鉱山界の大御所で、古河財閥の会長かなんかも勤め、俳人としても一家をなしていた、そういう非常に広い視野を持っておられた。そういう方をおつかいで、原産をつくったわけです。

創立時は事務局の人事は結構大変で、総務部長は経団連から来ましたし、事業部長は平和利用調査会から早川さんが来て、調査部長は電事連から小林さんて人が来た。渉外室長には通産省の誰かが来た。とにかく皆おれの領分さと乗り込んで来た。その時事務局長をどうするかはずいぶん揉めました。橋本さんが、本当に団体としてちゃんとやるんなら、事務局長を握らなきゃイニシアチブはとれない、だから俺は事務局長を兼ねるのでなければ、ただ並び大名の常任理事では嫌と、最後までだだこねまして。大変だっていうんで、結局最後は小坂順造さんと松永さんが二人直談判となり、ずいぶん激しく議論して、小坂さんのねばり勝 - -。常任理事は、橋本さんの他に、電事連から松根宗一さんが来たり、経団連からも堀越禎三さんが来たりしたわけです。その頃には私も、中央公論とのかけ持ちではもたなくなって、小坂順造さんが電源開発(株)の総裁になりましたものですから、電源開発で採用して、すぐ即日原産のほうに出向っていうことにしたわけです。

メーカーさんの方の体制づくりは、今日皆さんお見えですから、私が申し上げるまでもないんですけど、非常に早いです。一番早いのが、三菱でしたか。55年の10月には三菱原子力委員会、MAPをつくられた。それから日立のグループも、56年の3月には東京原子力産業懇談会をつくっておられるし、住友さんも4月に、住友原子力委員会でしたか。それから6月には東芝が日本原子力事業会をつくっておられるし、8月には第一原子力産業グループ。ご承知のように三菱、住友、東芝グループはそれぞれ原子力の専業会社をつくられたし、後の二つもそれぞれ研究所を持っておられた。まあ非常に早かった。原研が発足してまた燃料公社もできるということで、注文が出始めたからそれに対する体制がないといけない、委員会では受注できないから会社をつくれっていうことだったと思います。そのころ各社は皆、どのグループに入るか大変で、建設大手の中には、社長、副社長が別々に飛び回ってたもんだから、気が付いたら二つのグループに入ってたなんて珍事もあり、

そういう事情でそのまま二つのグループ入っているというのもあります。それくらいな盛り上がりがあったわけです。もちろん注文があったって全然利益にもならんし、大変競争が激しくて、あの当時は確か国産一号炉用の重水をアメリカから運ぶのに、入札したら、丸紅でしたか、マイナスの入札を入れまして、5百万円かなんかお金出させていただきますってのが出て、それで落としたんですよ。(笑い)

そういう時代でした。あんまりこういう状況じゃあ酷いから、そういうこともある程度調査しなきゃと、原産で今もやっております産業実態調査をやり、60年には「赤字白書」を出したんですけど、既にその頃もう3~4年で10億円くらいの赤字が専業三社だけで蓄積している。そんなことで費用賄えないぞみたいなことを言ったりしてやったもんです。その頃、やっとな電事連でもいわゆる原子力発電の計画をぶちあげたり、いろんなことを始めてはありましたけれども、どれほど積極的であったかはよくわからんです。

56年夏のことですが、内海清温電源開発総裁の時に、原子力のような新しい、しかも当分黒字の見込みのないものは、むしろ電源開発のような国営でやるべきだということをおちあげたんです。それが正力さんと河野一郎さんの両実力者による、例の有名な正力河野論争の始まりです。だいたい原子力ってのは、夏になると何か起きてました。とにかく暑い夏だった覚えがありますが、私はその頃まだ電源開発の祿を食っておりまして、しかも原子力産業会議の課長もしておりまして、板ばさみになってうろうろしておりました。結局は妥協の産物で、2割を電源開発が出資ということで日本原子力発電(株)ができたのが57年。このときは、電源開発と原産が対立して、僕なんか、お前はどっちだみたいなことを言われたこともあります。

言葉は悪いですけども、電気事業者の国営アレルギーをくすぐって、ぼやぼやしていると国がやるぞ、しっかりせいという感じであって、仕組まれたとまで言うと言いすぎかもしれませんが、ある程度松根さん辺りは、そのようなことを考えたフシがあります。20年も経った後で、雑談の言葉の端に出ております。あのおじさんとなると、その位のこともやったんじゃないのかと。(笑い)

そんなことで、原産のほうも56年には中部と関西に「原子力懇談会」ができ、59年には東北の懇談会もできたという状況でした。産業会議をつくった時には、菅禮之助さんが会長で、副会長が植村甲午郎さんと大屋敦さんと杉道助さんでした。常任理事に岡松成太郎さん、堀越禎三さん、松根宗一さんそれに橋本清之助さん、と言う状況でした。事務局には電力会社からの出向も多かったし、私も最初は電源開発からの出向だったんです。そのとき、裏話になるんですが、原産っていうのがいつまで要るであろうかという議論もあったんです。その時幹部連の頭にあったのは、要するに簡単な言葉で言うと、核アレルギーの解消にどの位の時間が掛かるだろうか。あと10年もやればいいんじゃないかという感じがありまして、職員は10年くらいでやめてもらってもいいように、退職金だけはたくさん出すようにしとけとか言ったらしくて。(笑い)退職金規定だけはいやに恵まれたものをつくった。私みたいに後々いつまでもやらされる人間は、途中で困っちゃって、うちの連中に言うと悪いんですけど、退職金の対象になる基本給を抑えて。(笑い)それで苦労するんですが、そこまで考えてあったようです。

ところが原子力の問題は皆さんご承知のように、なかなかP A(Public Acceptance: 公衆の受け入れ)の問題以外にも問題がいろいろありまして、やめるわけにいかなくて、原産も

今日で33年もやらしていただいている状況です。繰り返しになりますけど、最初の時期は、核アレルギーって言いますか、うっかり原子力に手を出すと痛い目に、火傷するんじゃないかというの、やはり一番大きな問題で、かなり後にも尾を引いております。最近の「広瀬 隆」現象も、ある意味でそれかもしれませんけれども。そういう意味でその後も、長期計画とかいろいろなことで民間が、とにかく原産も至らない組織ですけど、皆様のご援助で、とにかく民間一応一本になって政府に注文をつけ、政府も政策を変えないで、途中で中だるみとか石油危機という状況もありましたけど、今日まで来た。

今日はメーカーさんの方もおみえですが、先程私は、核分裂の発見の時からいろいろ申しましたけれど、かなり早い時期からそういう英語の文献等ぼつぼつ入っておったわけですから、メーカーさんの中には、早くから勉強はなさっておった方もいたのではないかと思います。原産ができる前後からの体制づくりは、財閥解体後の再編成の時期で、グループの結束を高めることが必要という感じがあったところへ、原子力はいい機会と捉えられたこともあるかもしれません。非常に見事に皆さんそれぞれ体制を整えられた。その動きなど見ておきますと、表から見ますと原研やなんかの受注の対応に見えますけれど、その前から、むしろメーカーさんの方が、アメリカのメーカーとの連絡があったりしたんじゃないかと、この辺私全然にはわからないんですが、そういうような気がするわけです。

一方、電力の方が本当に本気になったのは、大分あとだと思います。それまでは、差しさわりがあるかもしれませんが、そういう風には見えませんでした。ただ電力も、原電ができた時には、後で社長、会長になったような有能な人を、課長レベルで出向させています。菅さんとか木川田さんとか、そういう辺からトップの人は、燃料民営化のときもずいぶん議論がありましたけれども、非常に早い時期から、核燃料サイクルについても民活的な認識も非常に高く、先を見ておられた。原子力を取り込むことによって民意を高めて膨らましていくという動きの中で、原子力に食いついてものにしてきたような感じです。

1965年以降、電力の姿勢もずいぶん変わってきて、最近時々電力の幹部の方とお話すると、今社長になっておられる方は、その当時は取締役にもなっておられない方でしょうけど、原子力を扱うことによって「電力会社ってのも、ずいぶんグレードアップした」というんです。むしろその方が、原子力自体の技術面のメリットより電力にとって大きかったのではないかいうことを、電力会社の経営者のトップの方が述懐されるようになった。原子力の副産物かどうかわかりませんが。

私も、昔の方にいろいろ確かめてみたいと思っても、それこそ松永安左衛門さんもいらっしやらないし、松永さんにはもう少し聞いておけたらと思うんですけど。とにかく原産をつくった時は、橋本さんなんかまるで敵地へ乗り込むような悲壮な気持ちで、電力経済研の仕事を思い切って原産へ投入するという、江戸城明け渡しというそんな感じでした。菅さんとは会ったこともないわけだし、菅さんの方も、橋本さんなんてのは貴族院におったなという程度でしょ。松根さんもおそらく初対面だった。しかし、長い間そういう立派な人々が力を揃えてやっておられたということが、大変大きかったのでしょうか。

島村:どうもありがとうございます。15分ほど空費した割には、短いお話で。(笑い) ゆっくり話されれば、もう少し時間がたったかも。(笑い) 少しおうかがいしたいんですが、今日は福田さんなどもおられるから、そちらからも説明して下さると思うんですが、原子力という日本語が出てきたのは、いったいいつ頃だったでしょう。

森:あれは、だいたい49年ぐらいです。ちょっと手前味噌で申し訳ないんですが、私が中央公論で自然という科学誌の編集部において、USIS っていういましたかな、アメリカの科学情報局の出店のようなものが有楽町にあって、そこで原子力の写真を借りたり、情報をもったりしていました。その翻訳をずいぶんのせたのですが、nuclear reactor、nuclear power というものをどう訳すかという議論をしまして、あの時毎日新聞の記者だった金関義則さんという人が、今でもまだお元気でいらっしゃいますが、nuclear reactor は原子反応炉がいいと言ってくれたのを覚えています。

田中:一時反応炉って言ってました。furnace っていう言葉があったのかな。

森:最初は黒鉛を積み上げたから、pile と呼んでいた。だから原子堆とか訳したり。

原子炉に定着したのは、ちょっと手前味噌ですけど、ハフスタッツ氏という AEC の原子炉開発部長が書いたのを「自然」に載せたのが、確か49年か50年ごろですから、その訳を乗せた頃から、大体そういう言葉が定着していた。原子力とするか原子動力とするか。nuclear energy と nuclear power の使い分けでは、power っていうのは大体において、いわゆる原子力発電で、船の動力は含まないものを power っていうことが判った。

田中:そのころ、原子動力研究会って言ってました。

森:そうそう。その原動研が原産に入るのは、ちょっと遅れたんです。

田中:あれ別だったんですか。

森:ええ、今申し上げた中の電中研にあった原子力発電資料調査会、あれよりどういうわけか半年ほど遅れたんです。あれは技術者の独立主義のような気分がありまして、松永さんなんかの意向もあったんじゃないかと思うんだけど、かなりの時期まで大山松次郎さんに会長してもらって、高橋 實さんが世話役やって、なかなかこれは実勢を尊重しなきゃいかんって、こちらも腫れ物に触るみたいな、どうぞひとつご勉強くださいと。10年くらいたってからは、全くそういうことはありませんけど。

島村:原子力に関する言葉ってのは、誰がそういう風に決めたか、時々疑問に思うんです。今のお話の中にありましたが、それで思い出してお聞きするんですけど、原子爆弾が落ちる前の日本では、原子核物理という研究がある程度行われていたわけです。今日のお話にはなかったけど、陸軍、海軍それぞれが学者を呼んで、原子爆弾をつくれるかと言う研究をやったということだったんですけど、今日になってみると皆さんあまりおっしゃらんし、記録も少ない。誰々は陸軍に呼ばれ誰々は海軍に呼ばれたっていうようなことも、探せばあるんですけども。それはいいとして、敗戦後 GHQ の指令ということで、書き物によれば、原子力に関する一切の研究が禁止された。それで伏見康治さんが茅 誠司さんに頼んで、講和条約ができる時に、原子力の研究が全て禁止されるようなことでは困るから、なんとかしてくれといわれて、茅さんが外務省かなんかに確かめたところが、講和条約には禁止条項は入らんとということで、ほっとしたと言う伝説があるんです。

占領下における GHQ の指令による禁止の内容は、私はその原文を持っていないので、日本の科学百年史っていうのに出とったのを、コピーしてもらったんです。428 ページのところに出てくるんです。1945年9月22日 GHQ 指令第3号第8項には、「日本からのウラン235の同位体分離またはいかなる放射性不安定元素の同位体分離をきたすことを目的とする全ての研究または開発を禁止する。」とあり、さらに、1947年7月30日付の極東委員会における原子力分野での日本の研究における活動という文書の中には、「日本にお

ける原子力分野の全ての研究は、基礎または応用的性格のいずれのものも、禁止されるべきである。この研究には次のものが含まれる。①核分裂性核種の生産を目的とする全ての研究または開発、②化学元素の天然同位体混合物より核分裂性の同位体を分離または濃縮することを目的とする全ての研究または開発」とされている。

しかしながら、「実際にはこの間こうした科学的な研究が全く停止されたわけではなく、時折 GHQ の査察を受けながら、許される範囲で進められていた。天然放射性元素に関する放射線や地球科学的な研究は、困難な状況にかかわらず続行された。また原子爆弾災害に関する放射線科学的分析が行われた。」つまり、私は専門的なことはよくわからんけれども、原子核物理の研究自体ってものは、禁止されなかった。

森:禁止されなかったんです。戦後すぐ小型サイクロトロンを動かして、放射線生物学の研究を再開していますから。その後、45年11月29日に米軍によりサイクロトロンを破壊されて、アイソトープが一時入手できなくなったことはありますが。(理研の小型サイクロトロンの再建は、1951年12月に建設開始、52年12月完成、53年からRI生産開始)。

島村:壊されたサイクロトロンだって、核物理の研究を目的とするもので、確かにあれは行き過ぎであった、壊さんでもよかったものであることは確かなんです。

森:そう言われてるんですね。

島村:どうも占領軍の解釈が、同位体分離、一切の同位体分離がいかんてことになってくると、ちょっと問題だけ。その証拠に、GHQ に定例的に報告書を出さなきゃいかんからって、学術会議の中に委員会かなにかできた。大した研究成果もあったわけでもなかったろうけど、やってる人たちは集まって、GHQ にどういう報告を出そうかと相談しとったんです。だから、一切禁止されたというのは、ちょっと行き過ぎのような気がするんです。

森:そうなんです。先程おっしゃった中にありましたけど、「大量の」という言葉が入ってたでしょう。大量の。Considerable amount of なんかかって言葉があったんです。

島村:その辺が僕にはよくわからなかったんです。

森:そこは最初から入とったんです。

島村:もう少し早く原文が手に入っても、私の知識では分からなかったと思うんだけど、事実としては研究は行われておったということですね。

森:そういうことです、非常に少量の。

島村:今日になってくると皆孫引きみたいにして、原子力に関する研究は一切禁止された、みたいに書いてあるんです。そうすると原子力の研究というものと原子核物理というものの関係、その辺はどうも境目がはっきりしない。私はその点を疑問に思っ。どうもああいうものに大量のというのは入ってない、確かに木村健二郎先生のところが、放射化学的なものやとったんです。

森:この年表を見ていただくとありますけど、45年から50年にかけて、いろんなアイソトープを使ったってのが出てます。

[ 同位元素研究の対象は、次の4種と推定される。1) 広島、長崎に残留した人工放射性同位元素。2) 放射線生物学に利用した少量の人工放射性同位元素。3) 天然放射性同位元素。4) 安定同位元素の分離濃縮 ]

島村:ですから、それはいったい、原子力という言葉、研究っていうものの中に入るのか。原子力の研究と原子核の研究は違うんだと、こういう風に言うのか。どうもそのへんが私

にはわからんので、誰かに伺いたって思ってたんだけど、ちょうど森さんが。(笑い)  
森:いや、それはまだ今日の問題ですよ。だから加速器とかいわゆる原子核研究所でやるようなことは、日本の場合は原子核研究だという整理で。今度縄張りを議論して、科学技術庁が大型放射光施設 (SPring - 8) をいよいよやることになってきましたけれど、一応線が引いてあったわけです。ドイツなんかでは、カールスルーエ原子力研究所で大きな加速器をつくるとか、むしろそういう基礎研究が入る。

島村:私が在任中の時から、なんとなくその辺がはっきりしない。原子核物理というわけじゃないけど、アイソトープと原子力発電は車の両輪だと言われとったんだけど、法律的にいうと、アイソトープを原子炉等規制法から抜いて、別に放射性同位元素の障害防止に関する法律がある。そっちの方は別だということにした。そこで細かいところに行くと、同じ放射能に対する措置であっても、アイソトープの規制と、原子炉の規制と違ってくるといような面倒くさいことも出てくるわけです。それで大学の研究でも、原子力の方の研究になると、とたんに原子炉規制法がかかってきて、とてもうるさくて大変だから、大学ではアイソトープの研究に限るといような現象があるぐらいでしょ。

森:原子力基本法をつくった時は、原子力の定義はどうされたんですか。

島村:基本法でなにした時は、基本法自体は代議士さんがつくったんですからな。実質的に法案づくりには協力はしたけれど。

森:島村さんが書くとき、どういうつもりで書いたんですか。

島村:斎藤憲三さんなんてうるさかった。斎藤憲三さんの独壇場みたいで、両方ともはいっちゃんような意味で定義されたんです。

森:あんまり入れちゃうと、文部省の仕事に全部なってきます。調整の下に入ると。

島村:いや、それはまた別の話です。原子力の定義は、原子力基本法で定められて、どこの省だろうがなんだろうが、ぱっと全体にかぶせたわけです。それと原子力委員会設置法っていうのはまた別だから。原子力のことは全て原子力委員会というわけではない。大学における原子力研究は除くという矢内原声明と関係があるんで、ちょっとややこしいんです。

森:まあそれも改めて。

A:GHQ との関係もあったような、原研の吉川秀夫君なんかによると、ドクター・ハーマンですか？

川島:ケリーさん？

A:そうケリーさんだ。

森:ケリーさんの助言でできた(1949年1月)スタック (STAC、科学技術行政協議会) ってやつ。

A:そこで、同位元素の輸入の世話してもらったりなんかした。1950年からですか。

島村:私は子供みたいに何にもわからんから、何でも質問するんだけど、的確になかなか教えてくれる人が少ないですわな。原子力と原子核物理の関係なんか。その辺偉いと思うんだけど、日本語にないのを次々に翻訳していくのを誰がやったのか。たとえば、濃縮ってのがあるでしょ、enrichment。これを濃縮と訳したのは、いったいつ誰がそういう訳したんですか。

森:あれは私らだけじゃなくて、科学朝日も翻訳しはじめとったし、いろんなところから定着してきたんでしょうけど。私の記憶では、初めは「富化」と訳すのがいいって。

島村:富に化けるって書く。

森:ええ。それか濃縮がいいとか。両方使ってたことがあります。

島村:向坊さんなんか聞いてみても、知らないですよ。

森:まあ 51 年が最初だって言ってくださりゃあ、私は「自然」の編集者の一人にすぎなかったけれども。

島村:濃縮ってのは、enrichment をどうして濃縮と訳したのか、という疑問が僕ら素人には起こるわけです。それで教えを乞うて見ると、だ一れも分からん時代です。確かに富化というようなあれも、古い文献には見られるんだけど、まあ並存時代もあったでしょう。

森:まあ 52~53 年頃には、大体濃縮を使ってました。

島村:でも日米協定、第一回の研究協定の時は、外務省の翻訳なんかでも、全部始めっから濃縮になってたんですから。その前にあったからそれを採用しただけで、外務省が決めたわけじゃないんです。その濃縮って言葉がいったいいつどっから出てきたんだと。原子力に関しては用語が非常に難しく、僕らは表玄関の方ばかりいたからなんだけど、裏でいろんなことやとった人がいるに違いないという気がして、そこんところ考えてる。

A:翻訳の問題は、私が関係した 50 年代中ごろでも、燃料の細かい部品の話なんかは適当な翻訳がないから、自分で適当に日本語に直していた。多分、燃料集合体の集合体は私が使い出したんです。結局誰かが使い出して、ちょっと広い立場にいる人が使って、同時に他の人が言ってこないとそれが定着するし、同時に出てくると長いこと拮抗しながら二つ使われていくということで、誰もまとめなきゃならんと言いながら、木村健二郎先生なんかもよくそんなこと仰ってたんですけど、あんまりきちんとではなく、なんとなく決まってきた。20 年来、似たようなことじゃないでしょうか。

川島:私は、51 年にたまたまリエンソールの本を翻訳しまして。その動機は、TVA (Tennessee Valley Authority) の本を翻訳した続きの第二作で。彼が TVA 総裁の後で、46 年に初代の原子力委員会の委員長になるんです。それを辞めた後で、これを書いたんです。それで半分は TVA の話、半分は原子力の話。まさか原子力のこと翻訳するなんていう心算もなかったんですけど、やむを得ず翻訳した。Atomic pile は、反応炉とか原子炉とか組み合わせると原子炉ぐらいがいいと、あてずっぽうで自分としてはやったんですけど、きっとその頃は既に森さんのほうでは、そういうふうなあれを使われておったのかもしれない。自分自身としては、あまり学もないし、原子力をやるという気もなかったから。

A:51 年ぐらいですか。

川島:印刷が出たのが 51 年。だから 50 年くらいに翻訳を一生懸命やってたんじゃないかと思うんですけど。だから発生の過程からしますと、私は字引を引きながら、いいかげんにあてずっぽうにやったという。

島村:川島さんが言われるように、川島さんみたいに訳す人が方々にいて、皆それぞれに勝手な訳をつけてやるとるうちに、だんだん一つが残っていくことになるんですかな。

川島:いいものがこうだんだん、共通のものとして。

田中:原子炉っていう言葉が定着するまで、やっぱり変な言葉がいくつかありましたよ。反応炉だとか。どうも炉の字も火扁の「爐」じゃ変だから、金扁でこう書いた「鑪」にしようとか、ずいぶん苦心しましたよ。

島村:原子力って言うのは素直なようだけど、範囲がどこまでか、どの範囲を原子力という

のかということになると、どうも僕らにはわからんようになるんです。

川島:田中慎次郎さんなんか、ずいぶん早くから朝日新聞で原子力の勉強をなさって、秘密ということであまり外に出さないけれども、ずいぶん早い頃から。

田中:一番まとまって議論になったのは、アメリカから例の、研究開発用にウランを6キログラム提供するっていう話があった時の、協定なんです。あれ英語でぼんと来ちゃったでしょう。外務省は弱っちゃったわけです。どうやって訳したらいいかわかんねえと。

B:外務省の若手が一生懸命調べて、書いたんです。そうして、いろいろどうも聞いて歩いたらしい形跡があります。当時の通産省工業技術院の、当時は調査課だったです、その辺に尋ねてきて、そのときは田宮茂文さんと堀 純郎さんだったかな。しかし、必ずしも正鵠を得た訳文ができないわけです。しょうがないのであちこち聞いた覚えはあるんです。

森:あれは55年でした。最も問題化したのは、irradiated fuel。

田中: irradiated fuel と。これを訳しそこなって、大塚益比古さんに叱られたのが外務省の黒田瑞夫っていう条約局の課長さん。条約局は自分で訳さなきゃいけないわけだ。それで irradiated を間違えちゃった。

川島:後には、オーストラリアの大使をされた。

森:あの時は本当に使用済み燃料が問題だという感覚なかったから。勘ちがいして、「照射されない」と逆に訳しちゃったもんだから。

田中:「されない」と訳しちゃったんじゃない。「irradiated material」照射されない物質っていうのがどう考えてもおかしい、おかしいなと思っているうちに、朝日新聞にでかでかと、大塚さんに間違いだって書かれちゃって、参っちゃった。いまだに覚えている。黒田氏は非常に困ったですよ。

B:協定はそれでできちゃったんですか。「されない」でできちゃったんですか。

田中:できちゃったんです。それで、外務省は仮訳と書いてあるんだからいいじゃないかと。それ以来原子力には全て「仮訳」ってのがついてる。

森:そうか、それから「仮訳」がはじまったんだ。

田中:そうなんです、こわくて翻訳なんてできやしない。

森:僕なんかは攻撃するほうで、面白かったな。

田中:いやあ、攻撃されるのには参ったなああれは。第一 irradiated material ってどういうマテリアルかわかんないんだもん。

森:あの頃からアメリカは、ちゃんと核拡散考えとったわけですね。使用済み燃料のことをいろいろ条件つけていた。

島村:今のお話で、森さんは原子力平和利用調査会ができた頃は、中央公論社の森さんとして、講師をつとめたり。

森:ありますか、そんなのが。

島村:ええ、あるんです。原子力相互協定についてという題で講師をやっておられるんです。私は断片的にこういう資料を持ってるんですが、当時は3つの団体があったということになってます。電力経済研究所、後に原子力平和利用調査会というふうに、新エネルギー調査会と名前を変えて、それからさらに独立したんですかな。

森:いや、電力経済研究所の中に新エネルギー委員会ってのがあって、その新エネルギーを、原子力平和利用調査会に名前を変えた。

島村:電力経済研究所という名前で、原子力に関してずいぶん出版物出しておられるんです。そして、53年何月かはっきりしないけど、翌年ぐらいになって、一応仕切りをして、新エネルギーという風に内部的に分離したわけですか。それまでは、研究所の名前で出版していた。ここにあるのは電力経済研究所の資料です。欧米の原子力産業の開発の現状だとか、いろいろ出してる。「現下わが国の原子力開発問題に対する見解」とか、どんどん出してる。こういうのはどこに行ったら揃ってますか。私はそのうちの何冊かしか持ってないけど。

森:私のところにある、一箱ありますけど。

島村:それは原産じゃなくて、森さんのご自宅の方に。

森:ええ、うちに。

島村:そうですね。原産の資料室ってのはあるけど、どうも皆やっぱり原産ができてから以後のものばかりで。

森:いや、できてからのものも大分捨てないと。増える一方ですから。

島村:そういうのが一杯あるから。それで私は後で見えてみて、電力経済研究所なり、その原子力平和利用調査会、これはもうものすごい活動であったなという気がします。それはまあ人数もいっぱい集めて、調査の委員会みたいなものをつくって、それに森さんなども顔を出してるわけです。阿部滋忠さんは勿論のこと、アイソトープの鈴木嘉一君や、堀 純郎君なんかまで、その頃からちゃんと載ってるんです。だから皆名前が出てくるわけだ。だから相当な人をその時に集めてるのです。なんかかんか仕事頼んでは、活動しておられた。3つあるうちの、それが一番典型的な、活発だったという気がします。正力さんの方のやつは、一番活動してないんじゃないかねえかという気もすんですわな。ただこれには、書いた人もう死んじゃったから、もう確かめようもないんだけど。

森:柴田秀利さんの本ですか。

島村:柴田さんの本は、まあこれは自分の活動を中心に書いてありますから。はっきりせんととも間違ってる点もあるんでしょうけれども、その記述は、読売と日本テレビが一生懸命になって、海外から使節団を迎えるあれをやったわけです。「--使節団受け入れの世論づくりに邁進した。そしてその第一歩として財界と学界の代表者を結集して、原子力平和利用懇談会を発足させた」と書いてあるんです。さっきの話だと打合せ会であったかもしれないけど。

森:それは、同じだったのか別だったのかわからんけど、打ち合わせ会の方は、経団連でやってるんです。

島村:今、読売の副社長として采配をふるっている佐々木君は、その時一介の経済部記者として、財界人説得に奔走させられていた。彼の回想によると、さっき森さんが言われたのと同じ趣旨だけど、電力界の鬼といわれた松永安左衛門や、鮎川義介までが、ダムをつくれれば半永久的に利用できるから、原子力発電などやる時期ではないと言って容易に聞き入れなかった、と書いてあるんです。(笑い)松永安左衛門さんだって、原子力に対しては。

森:かなり長い間。

島村:躊躇しておったんだ。だから本当の先覚者じゃなかったわけだな。そういう頭の固い大物を次々と口説いて、ついに経団連会長の石川一郎を筆頭に、藤山愛一郎、小林 中、小坂順造、菅 禮之助、石坂泰三等々はじめ、学界からは八木秀次、亀山直人、内田俊一等々、66人を網羅して、4月28日工業クラブで発会式を行い、正力が代表に選ばれたと書いて

ある。これだってこう書いてあるから正しいってわけじゃなくて。もう記憶違いで書いてあるかもしれないから、本当はどうかということ調べようと思っても、この本位が一番詳しい奴で、正力さんが代表になったという、原子力平和利用懇談会が、何をやったかということは皆目わからんのです、記録がない。

森: そういう意味では、あんまりやってないんじゃないですか。非常に目立つことはやられたけども。

島村: それから、原子力発電資料調査会の方は、原産の本にも書いてあります。高橋 實さんと法貴四郎さんが、瀬藤さんを尋ねて、金貸してくれてわけで、外国の資料を集めなきゃいかんから金が要るってことで、資料調査会をつくった。そして誰とかを会長にしようと思ったけど、引き受けてくれないんで安川第五郎さんに話したら、二つ返事で引き受けてくれたと、こういうわけで。これは盛んに活躍して、翻訳を一生懸命やったりなんかした。私は一冊も持ってないけど、盛んに文献を翻訳したりなんかして、部会ごとに配ったりなんかしておったってということで、この活躍もある程度わかるんです。ところで、ちゃんとした産業界の団体ってことでなくて、さっきのお話にあった「原子力談話会」ってのは、だいたい学者の会なんですか。

森: 学者って言うか、青臭い、だいたい助手クラスの人たちです。1952～53年ごろです。

島村: それは代表もなしに、寄り集まって?

森: 代表は服部、大塚、森の三人がやって、「三羽カラス」なんて呼ばれて。カラスってのは、あいつら汚れてる。財界の人と話しに行くなんて、汚れているからカラスだ、なんて言われて。(笑い) 三羽鳥って仇名付けられたんです。

島村: 外務省で時々外交資料を公表します。何十年か経ったそれ以前の分は発表されるけど。

C: 稟議書かなんかを残す方法が決まってるんですか? 公文書館に行くものは何かってというのは、決まってないんですか。

島村: だから公文書館に送ろうと思う人がいるところのものは行くけど、そういう頭がない人がいるところのものは、一つも行かないわけです。(笑い) 個人差があるわけだ。私が原子燃料工業(株.)にいた時だって、そうだよ。核物質管理で報告書出すでしょ。核物質のほかには、廃棄物の量だとか、お役所は思いついた時に聞いてくるわけです。前出した数字とあんまり違うといかんと、担当者が心配してる。なにも心配することはない、役所じゃ前のと照らしあわせるたって、前のやつはなくなってるんだから。(笑い)

後藤: それに、やたら書類を積み上げて、整理は乱雑だし、役所のものか個人のものかわかんないから。引っ張り出すのが面倒くさいから、その辺に聞いたほうが早いとこういって、お叱りを受けるようなことになっちゃう。

C: 正直な方は、最初からその、探せばあるかもしれないけど。

島村: この頃は萩野谷 徹君とこの核物質管理センターで、コンピューターに入れたりなんかしておるけど、仮にあっても、役所は照らし合わせるってというようなことはやったことがないんだ。だから全然心配いらぬ。まあどンドン出せやと、(笑い) 言っとるんです。

後藤: 戦後、本当にアメリカの将校に言われて、確かにそう言われりゃその通りだ。誰がポスト替わっても、ちゃんと組織は動いてるんだから、そのファイルは相応のところから出てくるはずだ。ところが、日本の役所はそれが全然出てこないんですな。

森: この間、国土庁長官が引継書に署名したとか言ってるけど、あれは何ですか。

田中:あれは引継事項を皆が書いて。

森:詳しく書いて？

田中:いや、詳しくもないけど書いて。それを大臣は読みもしないで、ここに書いてあるからあなた引き継いでください、よろしくと。

島村:渡すほうも引き継いだ方も、読みやせん。(笑い)

後藤:大臣の引継書くらいインチキなものないじゃないですか。

田中:これはいかん。ばらしちゃったよ。

島村:いや本当にいい加減なものだ。森さんにまたお伺いしたいんだけど、民間の組織としては一応格好ついてるのは3つあって、それが結局原産に統合されたと。その言いだしっぺは、誰だろうか。さっきのお話では、やはり橋本の爺さん。

森:橋本さんが、正力さんにねじ巻いたんでしょ。

島村:この本によると、やっぱり柴田氏がアメリカの産業界の動きを見とって、で正力さんに進言したみたいに書いてあるんです。

森:そう。両方とも本当かな。

島村:それで、つまり橋本さんと小坂さんと呼んで、それで何したと。柴田さんの本では、こういう形になってるんです。だけど、わたしが総理官邸にいた記憶によると、その3人が揃って現れたってような記憶がないです。それは橋本の爺さんが、私が見たこともない爺さんがひょこひょこやって来て、正力さんの部屋に入って行かれて、その後、私が呼ばれたことは確かなんです。つまりその。

森:人を集めろ、ですか。まさに話が合ってますよ。

C:見たことないって、来られないんですか。

田中:その当時は。原子力委員会は初めてです。

島村:56年の1月か2月頃です。

森:あれは、誰かの講演会の帰りだったんです。

島村:それで、総理官邸に財界人を集めろと。そして、まず名簿をつくって持って行くわね。正力さんが見て、あれはいい、あれも呼ぶ、正力さんは、下の方はどうでもいいわけです。大物でないと。そして総理官邸の大広間かなんかでやる段取りつけて、案内状も出して、やれやれ済んだわいと。ただコーヒーくらい出せばいいんですから、と思ったところに正力さんに呼ばれて、席順位表持って来いってんです。席順位の案なんか、誰もつくってないわけ。(笑い)あわてて、メインテーブルであっちは誰々でこっちは誰々とやったら、正力さんは、全然これだめだって言うんです。そして名札をつくらせて、正力さん自分で考えるわけだ。自分のまん前は誰々と。僕なんかその頃若造でもあるし、知識がないから、大きな会社の社長ほど偉いというくらいの順番に並べたでしょ。誰かわすれたけれど東電の社長はとか。正力さんによると、そんなのはずっと脇の方でいいんです。

森:そういう状況でしたから。だから橋本さんにしてみれば、米国にAIFができたのが原産ができる前の年ですけど、要するに外国から会員に入ることができる、但し一国一機関に限るっていう規定があったんです。それじゃ入ろうってんで、電力経済研究所がもうAIFの会員に早くからなってるんです。だからイニシアチブ持ってるんです。それでぼつぼつ頃よしと。だから正力から呼びかけさせることになって、明後日集めることになったってところまで、私は聞きましたから。

島村:正力さんが、いの一番に真っ先に、一番いい席に付けたのが松永安左衛門なんです。

森:そうなんです。橋本さんの知恵だと思います。

島村:それで、あとは皆、その人物の個人的な力量ですな。肩書きはもう全然別で、正力さんには不要。その頃まだいわゆるサラリーマン重役も、戦後だからいっぱいいたわけですよ。みんな追放になっちゃって、若造が急に社長になったりしていた。だから、大会社の社長であっても、力量なんてたいしたことない。実力者順に駒を並べる。私は、ハハーと学んだんですよ。

森:松永さんがまだ原子力に積極的でもなかったし、やっぱりあの人の顔を使わないと電力付いて来んし。やっぱりそれは前に据えたんでしょう。

島村:私も森さんも感じたんだけど、今日じゃ電力でなければ原子力にあらずって時代になりましたけど。あの頃は、電力って言うのは本当に控えめでした。

森:控えめだったですよ。

島村:ずいぶん長く控えめだったという気がします。つまりさっき仰ったように、メーカーの方が積極的、非常に積極的だったけど、電力の方はずっとかまえて、なかなか。電力関係の人も勿論いるけれども、さっきの3つの団体にしたって、以前は電力の人が中心になってるわけじゃない。そういうことで、移り変わりを見たのね。その頃私はまだ若かったし、私の印象としては、原子力ってのは、どうしてこう老人ばかりが興味を持って一生懸命やるんだろうかと、不思議に思ってたんです。(笑い) 今となれば、まだそれでも私より若かったが。

森: ちょっと言い方変えなきゃならない。

実際、菅さんにしたって大屋さんにしたって、松根さんにしたって、今の私より若いかもしれないけど、皆老人ばかりが異常に、石川一郎さんにしたってそうだな。非常な熱情持って原子力、原子力。皆ね、仕事済ませたような人ばかりなんです。

田中:今仕事済ませた人は、何か考えるったって、ないんですよ。あればもう飛びつくでしょう。

島村:それはもう、不思議でたまらなかつた。

田中:いやあれは、面白かつたんでしょうきっと。

島村:商売になる、実際に自分がやるっていう問題でない、夢みたいなものですから。

田中:そう、夢だったからあれですよ。

島村:かえってもう老人が夢を持つんですな。今言ったような人たちだって皆、もう大体仕事を済ました人です。石川一郎さんだって、原子力に情熱感じて、経済団体連合会の会長という要職をなげうって原子力委員会に飛び込んだ。その時、原子力委員ってのは兼職が禁止されてるから、辞表を書かれるのがなんと百何通。サインだけ自分でされるけど、岩間さんって秘書が、せつせと辞表を書く。最後に僕が呼ばれて石川さんに言われたのは、とにかく四社だけは、どこだったか忘れたけど昭和電工が入ってたことは確かだな。これは切っても切れん関係があるからやらしてくれという話だから、そんなの結構ですよ、そんな辞表書かれる必要ありませんって言ったんだけど、曲げない人だから。辞表を百何通書かれたでしょう。情熱を持ってやられたっていうけど、新聞なんか見ると、もう経団連の方も四選目か何かで、もう石川さんもそろそろ辞めなきゃいけないんで、丁度いい行き先があったとか、悪口書いてあった新聞もあったけど、その情熱たるや大したもの。

森:ええ、よく勉強してましたよ。

島村:私もその後いろんなものを読んで、はあんと思うこともあるんだけど。さっきもお話になった、橋本さんが原子力との出会ってというのは、巣鴨から出てこられたばかりの後藤文夫さんから聞かされたんだと。後藤さんって人は、前から知ってる私の先輩になる大分県出身の人が友達だと、後藤さんも大分でしょ。私はその人の秘書しとったことがあるんで、後藤文夫さんってのはよく知ってたんだけど、それで、原産会議に役員として出てこぬは、出てこられても一言も物を言われるわけじゃないし。

森:なんにも言わない。あの方は--。

島村:どうしてかなと、かねて疑問に思ってたくらいですよ。そして、先覚中の先覚だったかと、いう気がするわけです。その後は、ずっと洗ってみると、中曽根康弘氏はいったい、何で原子力にああなったのかと。中曽根氏に言わせりゃ、それより前にも何だったと言うんだけど、やっぱしこれは、嵯峨根遼吉さんの影響が。

森:そうですね。

島村:石川一郎さんも嵯峨根さんなんです。嵯峨根さんから電話が掛かって来て、この際研究所を見にこないかって言われて見に行った。そうだとすると、嵯峨根さんに源を発しておる人たちは多いんだ。

森:多いんです。その通りです。

C:学術会議も嵯峨根さん。

森:学術会議は宗派がまた少し違いますから。

島村:茅さんに言わせると、俺はそのずっと前からだっってこう言うんだけど。茅さんは。

田中:嵯峨根さんの出身はどちらです。

島村:知らんな。嵯峨根さんは。

C:長岡半太郎の子息だから、出身は東京でしょう(長岡半太郎は長崎の大村出身)。

D:あの奥さんが確か、名古屋の岡谷鋼機の社長のお姉さんかなんかで。岡谷の社長、もう少しで会長になれるんだけど、私の義理の兄にあたります。

森:嵯峨根さんととも、少し資料があるかも知れない。この間嵯峨根さんのお嬢さんに出会ったんです。例の、アメリカの飛行機から手紙落としたでしょ。「原爆ができたから、嵯峨根さん早く日本は降伏する方がいい」という、あの手紙が欲しくなって探したら、RI協会の横山すみさんが、仙石節子さんっていう嵯峨根先生のお嬢さんに連絡したらいいってんで、電話したら貴重な手紙を喜んで持って来てくれました。

D:あるんですか。

森:長崎の直前に、B29から落っこしたんです。戦後2月くらい経ってようやく嵯峨根さんが受取ったんです。

島村:嵯峨根さんが正確に何年に渡米されたか(1949年12月)知らんけど、菊池正士さんだっって、朝永振一郎さんだっって、あの頃は皆アメリカ行っておられたんです。それであるけれども、嵯峨根さんだけが、あの方もちょっと異常な感覚持っておられたから、他の方はただ勉強ばかりしておられたみたいだけ。嵯峨根さんは来る人来る人つかまえては原子力施設を見せておられた。

森:あの人はやっぱり新しいこと好きだった。来る人来る人つかまえちゃあ洗脳してたんですよ、あれ。

島村:しかし、森さんみたいにその当時若い方は別として。あの頃リーダーシップを持っておられた方のほとんどは故人ですから。本やなんかに出てくるのは皆。

森:それじゃ島村さん手伝いますから、少し歴史をつくりましょうよ。

島村:知恵もないけれども、そういう人たちがどういう端緒で原子力に熱心になり始めたんだということは、私には極めて興味があるんです。

森:嵯峨根さんの先見性は大変なものでした。

島村:それからメーカーの方はやっぱしこれは、競争だから鋭敏だな。

A:どっかが始めたら、皆が一生懸命にやる体質があるわけですから。それにしてもやっぱり始めたのは、どこかですね。

島村:やはり会社のトップが、トップで誰かがやれと、調べろということでない。メーカーの方では、研究者が始めたってわけじゃないでしょう。そう思うんです。

A:研究者もいるでしょうけど、トップが皆熱心になってます。

森:瀬藤さん辺りにあれすると、わかるんですけど。

島村:瀬藤さんには僕はずいぶんお世話になって。それこそ炉型戦略なんか考えるっていうんで、聞きに行った時でも。東芝の、どこのビルだったかなあ、ちっちゃな部屋だったよ。

田中:銀座の辺にあったマツダビルの。

島村:何を聞きに行ったかっていうと、日本としては軽水炉の場合でも、PWR と BWR と両方ある、両方ってのもおかしいものじゃないですか。あなたは東芝だけど、いったいどう思われますかと聞きに行ったことがあるんです。そしたら瀬藤さんは、「島村君、ウェスチングだ GE だって言うけど、皆それぞれ考え出したわけじゃないんだ。ありゃ AEC (米国原子力委員会) が研究した結果をウェスチングと GE に渡して、それをああいいう風にもてはやしただけで、まだどっちがいいかわからん。しかしこれ要するに似たようなもんだ。日本で両方やってもそれはええだろう。」ってな話を。

森:それは、正鵠な話だ。

後藤:大したもんだ。

島村:瀬藤さんについては、いろんな思い出もあるけど、その話が一番。原子力の炉型戦略的な面としては、時々思い起こすんです。

森:それいつ頃ですか。

島村:コルダホール型東海発電炉を入れることは決まったけれど、その次は軽水炉だといっていた頃。

B:JPDR をどっちにするかって、いう頃ですか。

森:これは書かなかったんだけど、さっき申し上げたハフスタッドさんって、私の部屋に最近来られたんですよ。去年、一昨年になりますか 11 月頃。電中研の人が私のところに連れて来たと思うんですけど。要するに「原子力を最初日本に平和利用しなさいって勧めた一人」が自分だと。ホプキンスとローレンスと自分の 3 人で東京で講演会を開いて訴えた。

島村:その講演会はこれに詳しく書いてあります。

森:そうです。それで結果、なんか知らんけど今やアメリカより日本進んでるそうで、誰かに「お祝い言いたい」と思ったら、私の友達がこいつ (森) に言っとけばある程度関係者に伝わるだろうと言われて来ましたというわけです。私は、「ところでハフスタッドさん、一番最初は確かに名前見たけど、途中から米国の原子力界からお名前がなくなったよう

に思うんだけど、何故ですか」って言ったら、「いやその通りなんだ」って言うんです。面白い話なんですけど、ソ連が5千キロの原子力発電をやり、アメリカは、大変だこれ早く追いつかなきゃいかんと大騒ぎになって、それじゃ潜水艦の炉を陸に上げて発電すりゃ一番いいってんで、 SHIPPINGポート原発をつくり、軽水炉発電を急ぐことになった。

その時に、彼は反対したんですって。そこにあるものを、ぼんと乗せるっていうのは、ちょっと乱暴すぎる。もう少し、どの炉型が一番発電に向いているかを議論してから取り掛かるべきだと、ずいぶんがんばったんだけど、「皆、とにかくソ連に追いつくこと頭が一杯だってんで、押し切られてしまった。それが気に入らないので、わしは辞めアカデミーへ帰っちゃった」と。私も、軽水炉ってのはよほど「運がいい」炉なんですなと言ったら、そうかもしれんって笑ってましたけど。本当にお話しするのがやっとなんですよ、もう85位です。ちょっと私も劇的な対談だったと思う。たまたまぼんと来られたもんですから、30分位しかお会いできなくて。あの当時アメリカでは、そういう議論があったんですな。島村:読売で呼んだ、最初に来たのはホプキンス(ゼネラル・ダイナミクス社長)。招聘した使節団は、当時既に誰も知らぬものとはなない原子物理学者、サイクロトロン of 発明でノーベル賞に輝いたアーネスト・ローレンス博士。それに続いて米国原子力委員会の原子力開発部長として工業界の第一歩を受け入れ、特別功労賞を受けたローレンス・ハフスタッド博士。加えるに、私に原子力への目を開かせてくれたバーモン・ウェルシュ副社長と。森:ああ、あの一行ですね。

島村:この話も、原産の本にはちょっと何行か書いてあるけれど、さっき私が言った前史でしょ。だから日本の開発には、これは相当大きな影響与えてると思うんです。読売にもうトップで書き立てて、日比谷公会堂が聴衆で一杯になったと書いてあるでしょ。その講演会は55年です。だからあの本の中では、それは柴田氏が皆自分の功績のごとく、書いてある本だけでも、そうはいっても無視することはできないと思う。

森:いや、彼は当時の真相をよく知ってます。正力さんの秘書官です。単なる秘書でなくて。

B:じゃあ生きておられるんですか。

森:いや、昨年亡くなられた。若かったけど、まだ若いのに。

島村:お葬式に行ったけど。この部屋にも来てくれたことあるんだ。あの本は僕の名前が二ヶ所くらい出てくるから、一冊ぐらいくれていい筈なのに。とにかく、「島村が怒鳴り込んできた」と書いてあるんだ。正月声明[原子力委員会の初会合(1956.1.4.)のとき「原子力発電は実用段階」という趣旨の声明を、正力委員長が抜き打ち的に発表した]のときに。

田中:あの声明の時に。正力さんを怒りに行ったんだ。我ながらよしゃあいいのに。(笑い)

島村:あの時、ばかなこと勝手にしてもらっちゃ困ると思って、僕が怒鳴り込みに行った。

田中:大臣に言う代わりに柴田さんに言ったんですよ。

島村:その前に正力さんから、12月28日に命令が来て、声明出すから原稿つくってくれってから、僕書いたんですよ。我ながらよくできたと思って渡しておいた。ところが1月4日、正力さんから配られた声明見てみると、僕が書いたのとは全然違うんです。(笑い)

田中:で、怒っちゃった。

森:あの時は、私の家に湯川さんから電話掛かってきたんです。「すぐ来い」と、「原子力委員辞めようと思うから」。福田家に呼び出されたんです。湯川さん、その声明を読んで頭にきた、もう基礎研究なんてしなくていいって言っとる、こんなのお前たちが原子力委員会

に入れっていうから入ったけど、もう辞めるって。「先生いくら何でも今日入って一日目に辞めるってことはないでしょう」まあなだめたです。湯川さんの奥さんのスミさんと一緒になだめた。そっち側では、そういうことがあったんですか。それを知らないから、役所もいい加減だなあ。どうしてこんな声明出したんだろうなと思ってたんだけど。

島村:それが、島村が怒鳴り込んで来たと書いてある。

田中:怒鳴らざるを得なくなっちゃったから。

森:それでわかりましたよ。

島村:それでこの本によると、その後島村とは仲直りしたと書いてありますけど。だから一冊位はくれても当然。面白くおかしく、そう書いてあるわけです。

森:あの頃は、もう本当に大変だった。

島村:「5年以内に原子力発電をやる」という声明出せと、柴田氏が正力さんに進言して。

森:柴田さんと正力さんとは、向こう側でそれやっと思ったわけね。

島村:柴田さんは、結局喧嘩して読売から飛び出たんだな。

田中:最後はそこ書いてあるから。始めのほうに、大喧嘩したって書いてある。次の社長は柴田だって言ったんだけど、後で暴言吐いたんで、怒って俺やめちゃったって。面白いやつ。1985年に中央公論社から出ている厚い本です。ほとんどTVと原子力のこと。

島村:だけどさ、正力さんもだけど、この人も相当曲者ですよ。

田中:その辺ちょっと松根さんが絡んでたんじゃないですか。松根さんも柴田さんてのが。

島村:松根さんて、誰でも彼でも呼んで話を聞く、あれを説明しろこれを説明しろ。

後藤:あの頃の大人物は、皆横暴。(笑)

島村:そう、大臣以上です。外務省であろうと通産省であろうと、誰でも呼ぶんだもん。

後藤:大同製鋼本社ビルに松根さんの部屋があって、「鎮座」しておられるところに、片っ端から呼びつけるわけです。私は全然関係ないけど、この中でちいと物の分かるのはお前くらいだって、年がら年中僕呼びつけられる、蕎麦一杯食わされて。そのあげくにこんなに資料持って来て、これを俺が聞いてわかるように、30分で説明しろってんで。

田中:本当によく呼びつけてたな。

島村:松根さんは何でまた原子力に - -。

森:電事連の副会長だったんです。あの頃菅さんが初めて電気事業連合会というものを、独立した組織としてつくろうとした。そこで初めて電力会社以外から、専任の副会長を連れてきたんです。今では全く違うでしょう、東電の常務から副会長が入れ替わりで来る。

島村:今は、東電かなんかから連れてきて適当にやっつけてな感じですから。あのころはプロパーをつくらなきゃいかんってんで、総務部長なども、プロパーで採用したんです。

森:全然電力に関係ない方です。名前は忘れたけど。その時は菅さんらしく、ある程度一つの独立した団体としてきちっとやろうと、ごくわずかな間そういう時期があったんです。

島村:松根さん、僕も昔は知らんけど、とにかく第一回の原産の原子力調査団で、僕も役人やってたから、「顧問」かなんかで参加して - -。

森:あれは壮々たるメンバーでしたね。木川田さんとか、まだ常務でしたよ。皆その後でいわゆるオーナー社長みたいになられた人ばかり。富士電機の前田七之進さんも入っておられましたかな。皆さんそれぞれ。

B:住友電工の坂本さんが行ったやつですね。

森:そうです。技術課長くらいの時に。

島村:外遊中に電報が入って、技術部長か研究部長かに出世されたんです。

森:あの頃の外遊は、長いですから大変です。一ヶ月くらいすぐ経っちゃう。

島村:そういうあれに入ってたんですけど、私なんか肩書きは課長だったんだけど、役人だから「顧問」として入れてもらって、お供してぐるっと回ったんです。2ヶ月半くらいだったかな。途中で帰る人もあったし、入れ替わりも多少あったかもしれませんが、そうするとそりゃ顔見知りって言うより、大抵でも親しくなりますわな。土光さん（当時石川島社長）なんか、その後の旅で顔を合わせるけど、土光さんその時以来、島村は原子力屋だと思ってる。土光さんは私のことを、原子力ばかりやってると思ってるんです。

森:団長は、大屋 敦さんですか。

島村:団長は大屋さん。1956年のことで、海外は初めての方も多。特に電力会社ってのは、とにかくその時代なんか国内の産業ですから。メーカーさんと違って輸出入についての知識がない。まあ輸入はあるけども、電力の人なんてのは国外に出たことないでしょう。大きな発電所でもつくるって時、借款もらいに、経理担当の方がやっと思行かれるくらいで。原子力なんてことで電力さんから海外へ出たのは、木川田さんがそれこそ初めて位のものじゃないですか。

森:いや、あの時は、時効だからいいけれども、錚々たる顔ぶれでしょうが。とにかく外貨をもっとなんとかしろっていわれて、ちょっとやったら見付かりまして。原産の人じゃなかったけど。あのころは為替管理が厳しかったですな。

島村:そりゃ厳しかったですよ。私が、課長のくせに役人としては最高の、局長クラスの費用が出たんだけど、一日19ドル50セントかな。ずいぶん偉い人と一緒に行くにはたまなかったですよ。そりゃ国内でこそ土光だとか木川田だとかって、アメリカに上陸したら、何の誰兵衛やらわからん。先方の都合で部屋割当てられるでしょう。翌日の朝出発の前に、キャシャーの前で支払っているのを見ていると、瀬藤さんなんかより僕の方が高かったりするわけ。(笑い)

後藤:私も経験ありますよ。課長の時に、お偉方の会議に付いてったら、僕の部屋が、大屋晋三さんの次に高いんだもの。俺、もう本当に泣いたよ。金払えやせんもん。

島村:ウエーキ島に寄ってハワイに行くでしょ。ロイヤルハワイとかあるでしょ。僕の部屋は幸いにして、まだハワイで近いせいか、悪い部屋だったんです。それでも、部屋代が17ドル。朝飯したらはみ出ちゃう。

川島:それにしても2ヶ月半てのは長いですよ。

島村:飛行機は遅かった。クリッパーかなんかで。とにかくウエーキ島で給油して行かないきゃ、ハワイにも寄れなかった。

森:そのかわり送る方も大変です。羽田で万歳三唱してさ。

後藤:私もウエーキ島で給油です。59年に行った時、やっぱりそうでしたな。

島村:56年の9月に出発したかな。ロンドンに行ったら、もうオーバー買わなきゃならなかったですよ。スウェーデンなんか行ったら雪が降ってんの。長いこと掛かったんで、そういう状況でした。僕なんかのオーバーなんてのは、ロンドンの百貨店に行っても、子供売りのほうに回されるし。(笑い)

森:あの頃からスリムでいらっしやったから。

島村: だけどおかげで、そういうことあったから、産業界の方々に面識を得て。木川田さんなんかずいぶんかわいがって下さった方です。だから良かったんですけど。原子力の知識より、そういう方に知られる方が得して、よかったぐらいでしたが。松根さんなんかは、他の仕事されないで、調査団の団員としてずっと一緒だったわけです。

森: あの人もまじめに歩いてました？

島村: ええ。東海岸の魚釣りにいっぺん行かれたけど。それでまだ、ヨーロッパなんか商社もないでしょ。駐在員がデュッセルにいるんです。パリになんかも、一人もいないんです。一軒もまだ店出してない。パリになんて店出したら、案内ばかりの仕事になっちゃうからっていうんで、皆敬遠してデュッセルくらいにある。それで皆どっからでも飛んでくるんです。アメリカ行っても、ニューヨークからサンフランシスコまででも、商社の人がやってくる。けど、皆さん決してお金に不自由はなかったです。腹巻か何かにいっぱい持っておられるし。商社の方は現地で調達されるし。困ったのは私くらい――。

森: いや、だからだいぶお世話したんです。ちょっとやりすぎたなど。

島村: 私の方まで手が回りかねた。

森: そうそう。(笑い) 円がなきゃ。やっぱりドルはさしあげられませんから。

島村: 最後にローマに着いた時は、切符だけだ。飛行機に乗りさえすれば飯は食わせてくれて日本まで運んでくれると、そう言われりゃー、思い出がありますけど。

後藤: そうですね、僕が帰りにグアム島に寄ったときには、ポケットの中に 18 セントしかなかった。そしたら、喉渴いてしょうがないもんだから、コカコーラを一本 15 セントで飲んだんです。ポケットには 3 セントしかない。帰りに税関で、お前さん外貨どの位持ってるんだっていうんで 1 セント玉を 3 つ出したら、人をばかにするなって係官怒り出して。本当に俺これだけしかないんだって言ったら、立派なもんだって。立派じゃない、金ないんだよって。(笑い)

島村: いや、ちょっとまとまりませんが。時々勉強はしとるつもりなんですけど、皆さん方でも、何か古いものでもありましたら、お知らせいただくと有難いです。

森: ちょっと集めますか、それじゃ、ぼちぼちと。

川島: いつ頃から書き始めるおつもりなんですか。もう書いておられるんですか。

島村: 前史のほうは、すぐしようと思ってるんですが。いっぺん森さんに産業界のこと伺って、ある程度ことは考えてましたけど、細かい点はわからないけど、ある程度まとまりそうな気はする。学界のほうは大分念入りに聞きすぎたくらいで。政界のほうは私も半分くらいは知っとるし、話も聞いたでしょ。残りは行政でしょ。さっきお話した計画二課の課長を越智君ってのが僕の前にやりました。今、どこかの石油の社長やってるわな。

後藤: あの越智君ですか、越智度男(おちのりお)君。合成アルコール。

島村: 彼に、原子力利用準備調査会時代の話を聞かせてくれと。僕の持ってる資料も村田浩君からもらった資料も送って、少し思い出してくれと。村田君でもいいわけだけど、村田君はずっとだから、向こうはかえってごちゃごちゃになってると思うんだ。原子力やったことのない男だったら、鮮烈に覚えてると思ったら、「休み潰して詳細に読んで懐かしかったけど、書いてあること以外に、どうしても思い出せない。」って言うんですよ。

森: こういうものってのは、話してるうちに思い出しますよ。

島村: それで、当時経済企画庁の次官しとった、東電副社長の石原武夫さんとこも行ったん

だけど、これも覚えてないって言うんです。君の方が詳しいよって、君に皆任しとったからってな調子でしょ。(笑い) それで、しょうがないから村田君に頼んで、その次は原子力利用準備調査会。原子力委員会の前身みたいなものでしょう。あれが皆忘れられてるから、あれのことも書かなきゃいかんと思うんだけど、僕は半分より後だから。前半の話を少し聞きたいと。

川島:村田さん、当時メモをずいぶん取って持っておられたけど、少し捨てたとか言っておられました。

島村:精密じゃなくていいし。記憶だけでもいいから、思い出ぐらいのことでいいから話してくれって。田中君だって、工業技術院にいたから。調査会に出す資料なんかも工業技術院でずいぶん準備したんだし。

森:すいません、ちょっと私。

島村:今日はどうもありがとうございました。4時過ぎちゃって。お忙しいところどうも。今後ともよろしくご協力お願い致します。

森:いま、公明党がおかしくなったということ。

島村:公明党もわけわからなくなってきたねえ。伏見先生にしっかりしなさいと--。

#### (出席者懇談)

田中:草の根運動というのがあんまり出てくるようになったら、非常にあぶないんだそうです。西独が今から14~5年前草の根運動が、ちょうど日本と同じようになって、それからだんだん具合が悪くなってきちゃって、長く続いたらいいんです。それで今度非常に心配なのは、グリーンパーティが出てくると困っちゃうです。それで公明党あたりも、ちょっと心配している。

島村:自然保護ね--環境保護。知床問題など日本になかったわけじゃないけど、全然横断的でなく散発的でしょ。日本じゃそうたいして心配するあれはなかったけれど、最近にするのは、女の人だということですよ。

田中:だから女の方から選ばれて出てくるようになると、今まで関心のなかった女性が面白半分投票でもされると、沢山出てきて、沢山と言うことじゃなくても、3人でも出てきたらちょっと具合悪くなっちゃう。

島村:話聞かせたって、もう聴こうともしないし、理論的に話してもわからないし。純情そのもので「子供を守ろう」と言うようなことだけですから、却って怖いですよ。

田中:しかし、この間の23日、24日に配布された資料をできるだけ集めさせて見てみると、まるっきり原子力はなんだなんて、中身は全然書いてないんです。要するに怖いものだから、あれは止めさせるようにしましよってことで、こういうことをやりましようって書いてある。まるっきりなんだよ、原子力は怖いものと言しかない。後はずーっとこんなことすると面白い、こうやって皆でやっつけちゃいましようということだけなんだ。あれで通っちゃうのは、イヤになっちゃうな。

島村:この頃、なんちゃったって国民の生活は落ち着いて、少し余裕が出るようになったでしょ。僕の家もそうなんだけど、女は暇になつとるわけなんだ。そうすると、一番流行るのが、新聞の折込なんか、なんかカルチャーセンターとかいうのが出ているでしょう。なんでもあるでしょう。いっぱい女が行くわけさ。僕の女房は古墳に凝りだして、始

末に困るわ。

後藤：古墳はいいですよ、歴史に――。

島村：カルチャーセンターに行かない人は何するかというと、ふとした動機で子供を守ろうなんちゅうことになる、そっちにいつちゃうわけだ。そうすると自費を使ってでも参加するし、暇があるんだし。僕は文化が向上したせいじゃないかという気がするなあ。女性にゆとりが出てきた。

B：その通りだと思います。

川島：四国の伊方原子力発電所で反対の帰りに橋を見て、観光コースみたいなものです。

田中：観光コースだったですか。そんなつまらんことやられて、よわっちゃうです。

それで思い出しますが、伊方の発電所に手をつけたときに一番反対した人、60前後から上の人、その人達は反対するのが非常に生き甲斐だというんだなあ。こっちはむきになって一所懸命大丈夫と言うでしょう、ダメダメそなんじゃ全然ダメって言って、われわれ行っているいろいろと陳情したりするでしょう、それを見て喜んでるわけです。だから、世の中騒がして、愉快犯ですよ。反対運動がだんだん鎮火したら、バタバタ死んでいつちゃうんでしょ。しょうがねーや。

後藤：それから、全然原子力に関係のない私の知り合いの奥さんで、ちゃんとしたインテリなんですけど、そこの坊やがすばらしくできのいい、運動もよくできるし、頭のいい一人っ子なんです。かわゆくてかわゆくてしょうがないんですよ、親父がすこしずつこけるもんだから――。それでその奥さんが僕をつかまえて聞いたのは、「原子力発電所というのは本当に大丈夫なんですか」というんです。なんで原子力発電所なんだと聞いたら、チェルノブイリ事故とかいって、この子たちが大きくなったとき大変なことになる――。父親は商社の幹部で、原子力には全然関係のない人なんです。そう知能指数も低くない、頭のいい奥さんが、子供が心配だというわけです。こういうのは困るんだなあ。

B：若干 10 年周期位の学生運動の名残もあって、反体制運動は頭のいいやつがやっているのがまだ残っているでしょう。それに、怖いって話には、皆さん飛びつくでしょう。二つ重なりまして。怖いって話というのは、原子力じゃないけど、今朝の朝日新聞の投書で「貧血に肉と魚を食べれば鉄分が取れていいってのは、ものの本で勉強したんだけど、肉はやはり化学飼料だとか抗生物質が入っていて怖い、魚は海が汚れているところから採れるから怖い、私共は肴も肉もなるべく食べないで野菜を食べて貧血は我慢するんだ。」という投書がある。

島村：それで放射能降ったらかなわんというわけか。

B：そういう怖い話というのは非常に信じる。宗教みたいなものになる。

田中：宗教ですね。

後藤：私に訊いた奥さんも、子供に食べさせる物が心配だというわけですよ。

田中：それでもう一度言うんですが、伊方で反対した人達は非常に喜んだんですな。30 人位集まってくる人達は、歳が 60 以上でしょう。それで反原子力というのを旗印にしてわあわあやって、後は世間話をして楽しんで帰って行くわけです。そんなところに呼び込まれて、一所懸命説明するこっちのバカがいやになっちゃう、あほらしい。

後藤：うちのばあさんあたりがそれ位の年齢ですよ。暇で暇でしょうがないんだな。子供は大きくなっちゃってるし。

(参考) 仙石節子回顧談(「嵯峨根遼吉記念文集」より)

父に宛てたこの手紙は、1945年8月9日長崎に原爆が投下されてから数時間後の午後3時に、爆心地から約50キロ離れた諫早市郊外有喜方面の田圃で回収されました。それは爆風の大きさを測るために原爆と同時に、落下傘を付けて投下された観測用ゾンデの内側に貼り付けられた形で、帝国海軍技術中尉北村軍治氏により発見されたのです。

ここにある3人の友(中略)Dr. Luis W. Alvarez、Dr. Robert Serber、Dr. Philip Morrisonは(中略)広島、長崎に原爆を投下するため技術者としてアリゾナ砂漠での第1回実験に引き続き、南太平洋のマリアナ諸島の小島Tinianにきていました。

数日前の広島への原爆投下にもかかわらず、日本の降伏の色が見えないため、第2の原爆を搭載したB29を12時間後の長崎投下を目指してTinian島を発進させる準備が進められていたその時、アルバレー博士の発想からこの父宛ての手紙が発進を数分後に控えて製作されたのです。(中略)

諫早の海軍技術者の宿舎でゾンデから取り出された手紙は、直ちに海軍省へ届けられましたが、父がこの手紙のことを知ったのは海軍省からではなく、諫早の宿舎でゾンデが解体された折東大出身で父の名を知っていた技術士が居合わせ、その人から父はこの手紙のことを知らされたのです。しかし、父がこの手紙を目にしたのは、長崎に原爆が投下されてから約2ヶ月後の9月末のことでした。父は佐世保の元海軍鎮守府を訪れ、西田少将からこの手紙を受け取っています。

この手紙にはサインがしてありませんでした。父は1946年3月、来日していたウイルソン・コンプトン博士にこの手紙を託し、その兄のアーサー・コンプトン博士に手紙の差出人を捜してもらうよう依頼しました。(中略)

一方、ローレンス研究所に戻ったアルバレー博士は、日本の物理学者が戦時中及び終戦後のアメリカの科学雑誌や学会の資料等を入手できないことを知りました。(中略)博士は真珠湾攻撃以後のPhysical Review誌全巻と、同時期のScience Abstractsを日本の科学者のためもらい受け、(中略)GHQの一員として来日していたFox博士あて送り届け、東大の父の研究室へ届くよう手配して呉れるよう依頼しました。その依頼の手紙の中でアルバレー博士は長崎に投下した手紙のことを述べ、一部でも自分のところへ記念に戻してもらえたらと尋ねて来たのです。Fox博士のもとへ送られたPhysical ReviewとScience Abstractsは、ただちに父の所へ届けられました。(中略)

1949年12月、(中略)アイオワ大学に向かう途中父はバークレーに立ち寄り、カリフォルニア大学でアルバレー博士と再会、そこで長崎の手紙の写真コピーにアルバレー博士のサインをもらったのです。1949年12月22日のことでした。(中略)

父の13回忌に当たり、(中略)古い書類を整理して(中略)カリフォルニア滞在中と記された書類の束から、アルバレー博士とモリソン博士のオリジナルサイン(手紙の左上と右下)のある写真コピーの手紙が発見されました。モリソン博士のサインは1950年6月3日になっています。モリソン博士が、この手紙にどこでサインされたのかは分かりません。

私達の記憶にある父の机はいつも書類の山で、本人は整理してあるのだと言ってはおりましたものの、一度これらの中に埋没してしまうと中々見つけれないままのものがあったのに違いありません。今回アルバレー博士とモリソン博士のオリジナルサインのあるコピーが見付かり、安堵しているのは、もしかしたら父ではないかと苦笑している次第です。

In a happier time.

With best wishes

June 3, 1950 Philip Morrison

Headquarters

Atomic bomb command

August 9, 1945

To: Prof. R. Sagane,

From: Three of your former scientific colleagues  
during your stay in the United States,

We are sending this as a personal message to urge that you use your influence as a reputable nuclear physicist, to convince the Japanese General Staff of the terrible consequences which will be suffered by your people if you continue in this war.

You have known for several years that an atomic bomb could be built if a nation were willing to pay the enormous cost of preparing the necessary material. Now that you have seen that we have constructed the production plants, there can be no doubt in your mind, that all the output of these factories, working 24 hours a day, will be exploded on your homeland.

Within the space of three weeks, we have proof-fired one bomb in the American desert, exploded one in Hiroshima, and fired the third this morning.

We implore you to confirm these facts to your leaders, and to do your utmost to stop the destruction and waste of life which can only result in the total annihilation of all your cities if continued. As scientists, we deplore the use to which a beautiful discovery has been put, but we can assure you that unless Japan surrenders at once, this rain of atomic bombs will increase manifold in fury.

Finally signed  
Dec. 22, 1949

to my friend Sagane  
with best regards from  
Luis W. Alvarez